

氏名	後 藤 清
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	甲 第 3270 号
学位授与年月日	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	肝結節性病変における CD68 陽性細胞の局在に関する組織病理学的検討
論文審査委員	主 査 教 授 櫻井 幹己 副主査 教 授 福島 昭治 副主査 教 授 金田 研司

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】最近の画像診断の進歩により、早期肝癌や腺腫様過形成などの境界病変が発見されるようになってきた。磁気共鳴断層法では含鉄物質を用い、肝内のクッパー細胞に取り込まれる性質を利用して診断する方法が開発されている。

今回の研究では、肝細胞癌にいたる多段階発癌が想定される結節で類洞及び血洞の変化においてクッパー細胞がどのように変化するか知るため、大再生結節、腺腫様過形成、いろいろな分化度を示す肝細胞癌（肝癌）、そして比較のため転移性癌結節について CD68 抗体で酸素抗体法を用い、クッパー細胞あるいはマクロファージ（CD68 陽性細胞）の細胞数を調べた。

【対象および方法】肝腫瘍の手術症例 152 例、病理解剖例 17 例より選出した 217 の結節性病変（高分化肝癌 37 例、中分化肝癌 57 例、低分化肝癌 56 例、早期肝癌 18 例、腺腫様過形成 12 例、大再生結節 21 例、転移性癌結節 12 例）を酸素抗体法を用いて CD68（KP1）抗体で染色し、一定面積あたりの陽性を示す CD68 陽性細胞数を調べ、それぞれの結節について比較検討した。

【結果とまとめ】肝細胞癌、大再生結節、腺腫様過形成、転移性癌結節のマクロファージはいずれの結節においても結節内の CD68 陽性細胞は非結節部に比して有意に減少していた。結節径が大きくなるに従って有意に CD68 陽性細胞数の減少がみられた。更に結節の分化度が低下するに従って腺腫様過形成、早期肝癌、高分化肝癌、中・低分化肝癌の順で CD68 陽性細胞は有意に減少した。これは肝組織の腫瘍化に伴う類洞の血管の変化とも相関する。

以上より、含鉄物質による造影などの結節内マクロファージの減少を利用した画像診断法は結節の質的診断に役立つと考える。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

最近の画像診断の進歩により、腺腫様過形成や早期の肝細胞癌（肝癌）などの境界病変が発見されるようになってきた。含鉄物質の造影剤を用い、肝内のクッパー細胞に取り込まれる性質を利用して診断する磁気共鳴断層法が開発されている。

今回の研究では、肝癌にいたる多段階発癌が想定される結節で類洞及び血洞の変化においてクッパー細胞がどのように変化するかを知るため、大再生結節、腺腫様過形成、いろいろな分化度を示す肝癌、そして比較のため転移性癌結節についてクッパー細胞あるいはマクロファージのマーカーとして CD68 抗体による酸素抗体法を用い、陽性細胞数を調べた。それにより磁気共鳴断層法での診断が如何に組織病理像に反映されるかを調べた。

肝腫瘍の手術症例 152 例、病理解剖例 17 例の計 169 症例より選出した 217 の結節性病変について、一定面

積あたりのCD68陽性細胞数を比較検討した。

肝癌，腺腫様過形成，大再生結節，転移性癌結節のCD68陽性細胞数はいずれの結節においても結節内は非結節部に比して有意に減少していた。結節径が大きくなるに従って有意にCD68陽性細胞数の減少がみられた。更に結節の分化度が低下するに従って腺腫様過形成，早期肝癌，高分化肝癌，低分化肝癌，中分化肝癌の順でCD68陽性細胞は有意に減少した。

更に結節径が2 cm以下の小結節では，肝硬変の大再生結節と早期肝癌のCD68陽性細胞数に有意差がなかったが，中分化肝癌は，結節径が2 cm以下でも高分化肝癌および低分化肝癌に比べCD68陽性細胞数が減少していることがわかった。前癌病変である腺腫様過形成結節は他結節とは異なり，16例中3例に背景肝硬変よりCD68陽性細胞数が多いものがあり，多様性を示すことを明らかにした。

本研究は，肝癌の多段発生における類洞の毛細血管化に関与するクッパー細胞の動態を明らかにし，含鉄物質を含む磁気共鳴断層法による肝癌の診断が幅広く臨床応用できる可能性を示唆したものである。

したがって，著者は博士（医学）の学位を授与されるに値するものと判定された。